

2010年7月5日

博士学位論文審査報告書

大学名 早稲田大学
研究科名 人間科学研究科
申請者氏名 真田 久
学位の種類 博士(人間科学)
論文題目 近代ギリシャのオリンピック競技祭の展開と変容に関する研究
論文審査員 主査 早稲田大学教授 蔵持不三也 博士(人間科学)(早稲田大学)
副査 早稲田大学教授 寒川恒夫 学術博士(筑波大学)
副査 早稲田大学教授 森本豊富 Ph.D.(UCLA)

本論内容

本論の目的は、1896年にクーベルタンによってアテネで第1回国際オリンピックが開催される以前、すなわち1832年にトルコからの独立を果たした近代ギリシャにおいて、1856年から1889年にかけて4回にわたって営まれた「オリンピック競技祭」の展開と変容を、その文化的・社会的要素(競技祭の社会的背景と理念・運営組織・競技規則・出場者)に着目しつつ考察するところにある。本論の最大の特徴は、国際オリンピックの前史ともいべきこの競技祭の実態を、英・独・仏語や邦文の先行研究および関連文献のみならず、当時のギリシャ語史料(オリンピック委員会・ギリシャ政府刊行史料、オリンピック・遺産管理委員会、ギリシャ王室条例、新聞・雑誌)などから詳細かつ丹念に調べ上げた点にある。

著者はまず序論において、近代オリンピック競技祭に関する先行研究の瑕疵、すなわち本論のような客観的なギリシャ語史料がほとんど用いられてきなかったことや、競技祭を構成する産業博覧会(や芸術競技)についてもこれまで等閑視されてきたなどを指摘する。この指摘は、たくまずして本論文の独創性や独自性を示すものといえる。

続く序章において、著者は近代ドイツとイギリスにおけるオリンピック競技会を素描し、「19世紀のヨーロッパにおいては、古代ギリシャのオリンピックを意識したオリンピック競技会の復興が試みられ、それらがキリスト教の国教化に伴って禁止された「古代オリンピック競技祭を、近代社会に適応させた形での復興を目指したもの」とであると結論づける。

「ギリシャ独立と古代オリンピック競技祭復興の始まり」と題した第一章で、著者は独立以前のギリシャ人の身体活動に触れ、特定の祝日にギリシャ各地で行われていた競技の内容を、古代オリンピック競技祭のそれと比較したあと、ギリシャにおいては、古代より芸術と体育とが密接に結びついていたことや、古代ギリシャ文化への回帰が新古典主義的建築などによって喚起されたことなどを指摘する。そして、こうした古代回帰の傾向が体育・

スポーツの面でも現れ、「それが古代オリンピック競技祭の復興」へとつながったとする。

独立後のギリシャでは、体育先進国のドイツの影響や国王 Othon の意向を受けて、学校教育の場に近代体育が導入されるが、著者はここでもそれを詳細に論述している。この動きが、やがて古代オリンピック競技祭の復興への素地となったという。その提唱者がギリシャのロマン派詩人 P・Soustos だった。古代ギリシャ文化に民族的アイデンティティを求めた知識人のひとりである彼は、競技祭の復興をときの内務大臣 Ioannis Kolettis に上申し、これを受けて、Kolettis は競技祭を産業復興の契機ととらえ、国王に働きかける。こうして 1837 年、国王の裁可のもと、全ギリシャ的な競技会の開催をうたう王室条例が公布される。だが、全 36 条からなるこの条例は産業振興に重点を置いたもので、運動競技や芸術・音楽の競技に関する条項はわずか 1 条だけだった。Soustos の理念が実現するには、ルーマニア在住の富裕なギリシャ人貿易商 Evangelis Zappas の登場を俟たなければならなかった。

第二章「第一回オリンピック祭の開催」では、Soustos の理念に共感した Zappas が、私財をオリンピック祭に投じる提案をし、それを受けて、運動競技と産業博覧会とを主軸とする第一回のオリンピック祭が 1869 年に開催されるまでの経緯とともに、それに対する国内・国外（ドイツ・イギリス）の反響とが、主に当時の新聞記事に基づいて詳述されている。

さらにこの章では第一回オリンピック祭と古代オリンピック競技祭とが、理念や組織、規定、種目について比較検討されている。そして、一連の詳細な作業のあと、著者はこう指摘する。「古代オリンピック競技祭からすると、1859 年の第一回オリンピック祭は、古代の運動競技種目や運営面で古代の伝統を受け継ぎつつも、産業振興を図るために、産業製品の競技という近代的な競技を導入し、それを中心に構築された近代的なオリンピック競技会に変容して行われたといえる」。第二章にはまた、資料として、「古代オリンピック競技祭と宗教」や「古代オリンピック競技祭優勝者への賞」、「古代の競技施設」、「パンアテナイ競技場」、「アマチュアリズムとギリシャ競技の衰退」が併載されてもいる。

第三章の「第二回～第四回オリンピック競技祭の展開と変容」では、Zappas の没後 5 年目の 1870 年に開催された第二回オリンピック競技祭から、1875 年の第三回オリンピック競技祭、さらに 1888 年（産業博覧会・芸術競技）と翌 1889 年（運動競技）に催された第四回オリンピック競技祭のそれぞれについて、その構成や競技内容、出場者、産業博覧会の特徴などが編年的に論述されている。そこには、Zappas の遺産の管理とその遺志をオリンピック祭に反映させるため、1865 年に組織された「オリンピック・遺産管理委員会」（1903 年、ザッパス委員会に改称）の活動も紹介されているが、第四回オリンピック競技祭後、この委員会は各国で開催される国際委員会や万国博覧会に関与していったともいう。

「国際オリンピック競技会の受容と Coubertin との対立」と題された第四章では、まず、国際的なオリンピック競技会の開催が、定説となっている 1892 年のクーベルタンの表明以前、すでに 1880 年にイギリスのウェンロック・オリンピック協会によって計画されていたという。これもまたオリンピック史に関する重要な指摘である。つまり、クーベルタンは

同協会会長の高齢な W.P.Brookes の個人的な支援を受けて、自らの情熱を実現するようになったというのである。こうして 1896 年、第一回国際オリンピック競技会がアテネのパナテナイ競技場で開かれる。それにはギリシャ皇太子の呼びかけに応えた、アレクサンドリア在住のギリシャ人富豪の G. Averof を初めとする国内外のギリシャ人からの財政的な援助が大きく与って力があつた。この大会では資金集めのみならず、一部の競技種目や芸術競技もまたオリンピア競技祭の伝統を受け継いでいたという。賞金を伴わないアマチュアリズムについても、第二回以降のオリンピア競技祭と、王室が後ろ盾となり、「若者のトレーニングと心身の教育」を目的として 1891・93 年に催された、全ギリシャ競技会で先行的に導入されていた。

だが、国際オリンピック競技会は、あくまでも開催都市の持ち回り性によってその国際性を獲得しようとする点において、ギリシャ中心を志向するオリンピア競技祭と決定的に異なっていた。著者によれば、それはまた国際オリンピック競技会をオリンピア競技祭の継承ととらえ、その開催地をアテネに限定しようとするギリシャ側との対立を招いたという。そしてこの対立の溝を埋めるかのように、クーベルタンの反対をおして、1906 年にアテネで中間オリンピック競技会が開かれた。

以上の歴史的経緯を踏まえた上で、本論は結章の「ギリシャのオリンピア競技祭の展開と変容」へといたる。著者はここでオリンピア競技祭の組織や競技会場、財政、競技種目と出場者の変容に加えて、産業製品競技や芸術的競技の変容を簡潔にまとめ、最終的に次のように結論付ける。すなわち、中間オリンピック競技会は財政的に廃止を余儀なくされたが、オリンピア競技祭は「民族的、文化的なオリンピック競技会であり、19 世紀と 20 世紀（国際オリンピック競技会）をつなぐ競技祭であったと言える」。

なお、本論文（一部を含む）が掲載された主な学術論文は以下の通りである。

- 真田久「近代オリンピックの形成におよぼした“ギリシャオリンピック”の影響に関する研究」、《体育学研究》、第 36 巻、第 2 号、日本体育学会、1991 年、pp. 97 - 104 .
- 同「1859 年の“ギリシャオリンピック競技会”における産業博覧会に関する研究」、《スポーツ産業学研究》、第 4 巻、第 2 号、日本スポーツ産業学会、1994 年、pp. 7 - 15 .
- 同「近代ギリシャにおける第二回オリンピア競技会に関する研究」、成田十次郎先生退官記念会編『体育・スポーツ史研究の展望』、不昧堂出版、1996 年、pp. 337 - 350 .
- 同「初期の近代オリンピックと博覧会の関連に関する一考察」、《スポーツ産業学研究》、第 8 巻、第 1 号、日本スポーツ産業学会、1998 年、pp. 11 - 18 .
- 同「近代オリンピック前史・近代ギリシャ人によるオリンピック復興」、望月幸男・村岡健次共編『近代ヨーロッパの探究・スポーツ』、ミネルヴァ書房、2002 年、pp. 245 - 277 .

H. SANADA : The Artistic Competition in the Greek Olympian Games in 19th Century, “International Journal of Sport and Health Science”, vol. 7, 日本体育学会国際誌, 2009, pp. 23-30.

評価

上述したように、本論文は独立後の近代ギリシャにおいて、国民的なアイデンティティを涵養ないし高揚するため、古代オリンピア祭に範をとりながら、あわせて産業振興を目的とするオリンピア祭のありようを、歴史人類学の手法を用いて、膨大な一次史料を中心に再構築したものである。この競技祭は、いわば過去志向のベクトルと未来志向のベクトルとの接点に位置づけられるという。そしてそれが、技術的にも精神的にも国際オリンピック競技会の素地となったとする。その論旨は詳細に立ち至りながらまことに明快であり、斯界のレベルをはるかに凌駕した着想の独創性と論述の説得力に富んだ、文字通りの力作とあってよい。一次史料を丹念に読み込んだ成果としての発見もふんだんに見受けられる。本書が刊行されれば、わが国はもとより、外国のオリンピック史研究に大きなインパクトを与えること必定と言っても、決して過言ではないだろう。

以上のことに鑑みて、本審査委員会は、本論文が博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認めるものである。

以上